

秘伝の太刀筋

文/鈴木智也
撮影/窪田正仁

天真正伝

香取神道流剣術の 技はなぜ長い？

古武道大会などで天真正伝香取神道流の演武は何度も見ているが、どうしても理解できないことがあった。それは剣術の形一本一本がなぜあんなに長いのかという点である。一つの技で五回、六回、いや十回以上になるだろうか、両者の木刀が

何度もぶつかった後でようやく勝敗がつく。実際の切り合いがそんなに長く続くとは思えないし、続くにしても想定通りの順序で攻防が展開するとは限らないだろう……。日本古武道演武大会のパンプレットを見ると「稽古中武器と武器が激しく当たっているが(実際は斬っている)」と説明がある。どういうことなのか……。

機会があれば、その太刀筋について聞きたいと思っていた。長い技の理合を詳しく聞いて誌面で紹介できればと、大竹利典師範や次男である京増重利師範代らが稽古をしている千葉県成田市の神武館道場を訪ねた。

総合武術以上の知恵の集積

飯篠長威斎家直(1387~1488)

が、武神香取神宮に千日千夜の大願をたてて修行を続け授かったという天真正伝香取神道流は、念流、中条流、陰流などとともに、剣術流派として最も古い部類に属する。その道統が600年の間、飯篠家に代々受け継がれているという点で、他に類を見ない貴重な存在といえる。現在は二十代飯篠快貞氏が宗家をつとめる。

大正15年生まれ、現在88歳の大竹師範は、昭和17年に香取神道流入門、同流中興の祖と言われた林弥左衛門に就いて修行した。昭和35年に飯篠快貞宗家らによる天真正伝香取神道流の型は千葉県無形文化財に指定され、大竹氏と子息である長男信利氏、次男京増重利氏も順次指定を受けている。

香取神道流の技には、互いに太刀を遣う形として「表之太刀 四ヶ條」(甲冑着用)の技、「五行之太刀 五ヶ條」(甲冑を着用しない技)、「二刀を遣う」(両刀 四ヶ條)があり、さらに「小太刀 三ヶ條」がある。居合術としては「表之居合」「立合拔刀」「極意之居合」の十六ヶ條、そのほか各種の得物を遣う「棒術 六ヶ條」「薙刀術 四ヶ條」「槍術 六ヶ條」「手裏剣術」、さらには「柔

術」も合計三十六ヶ條が伝えられている。それだけではない。「忍術」も伝わっているし、「遁甲術」として「九字、十字之法」(密教由来の印を切る呪法)、「方術」(方位学)、「軍配法」(戦場で兵の攻防の吉凶を判断する法)、「狼煙」(「気学」(生まれ年などから吉凶を占う法)、「築城術」といった幅広い「術」が同流には伝わっている。「総合武術」という言葉があるが、「武術」のみならず戦いや人間の生活全般に及ぶ知恵が幅広く伝わっているのである。

大竹師範の著書「平法」(日本武道館/発売)ベースボールマガジン社)にはそれらの術の一端が紹介され、「狐憑き」を払った実体験なども述べられている。「武術」の概念が変わってしまっような、摩訶不思議ともいえる日本の伝統の深い面に触れられる書である。興味のある方はぜひ一読を。

危なくて教えられない崩し

大きく跳び上がって抜刀する居合なども興味尽きないが、今回は剣術の太刀筋の話である。大竹師範に「表之太刀」について聞いてみると、こういう答えが返ってきた。

「一回一回切っているんです。実際は一振りごとに死んでいるわけですが、本当の太刀は見せません。それは親子兄弟同門たりとも見せないということ、今でも血判を押してそう誓って入門しているのです」

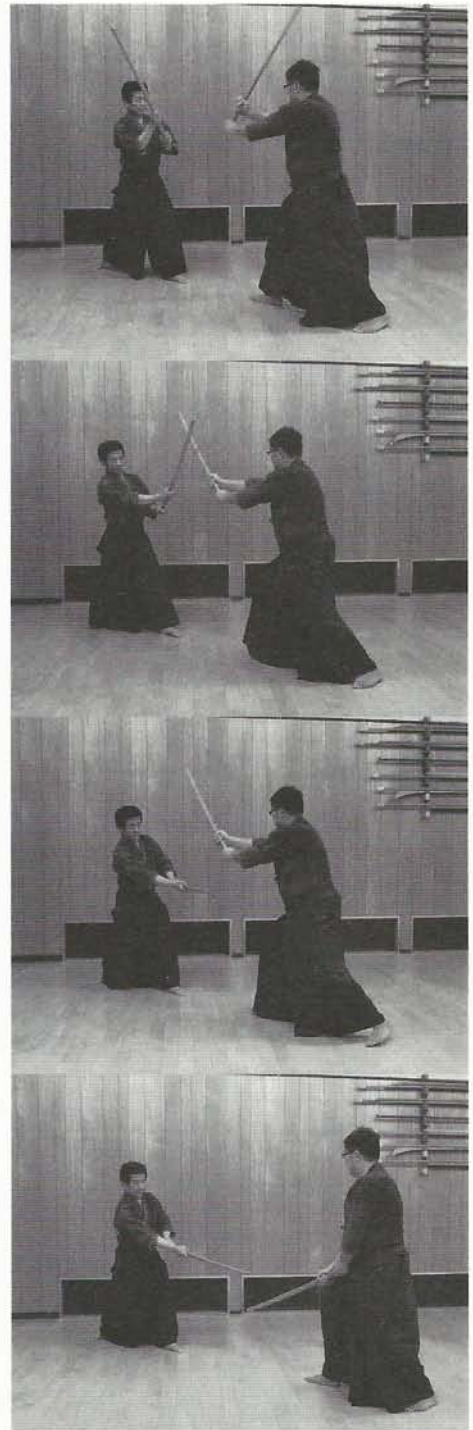
つまり本当の技は門外不出で、それを



大竹利典師範は70年以上の修行歴を持つ



実際は右の二コマ目の切り結ぶところで、このように受けた瞬間に深く入って相手を切るのが本当の技なのである



「表之太刀 四ヶ條」の中のある局面。このように太刀を切り結び、その後で胴など(写真は内腿)を切るという動きは多いが……

盗まれないために、演武で行なう技では違った動きとなって次の動作に続いていくのだ。本当はほとんどが体をかわしながら受け、かわしながら一太刀一太刀相手を切ることができるように作られているという。「受ける間があれば斬れ」という極意が伝えられているようだ。

「だから(演武を見て)どこを切っているか分からない。他流の先生に『神道流はあんなに何度も何度も切り結んで、刀が刃こぼれだらけになってしまうのではなにか?』と言われますが、『そうでしょうね』と私は答えるだけです。『本当はそうじゃないですよ、別なところを切っているんですよ』とは言えないんです」

たとえば写真で紹介している局面は最初に互いに切り結んだ後、左の人が相手の内腿に切りつけ、相手は下がってそれをよけるという流れだが、本来は切り結ぶと

ここで左の人がスッと間に入って相手を切ってしまうのだという。

しかしそれを隠し、形として技を続けるために内腿を切りに行くのだ。そうやって技が続いていくので、何度も何度も互いの太刀がぶつかりあうことになる。実際はそのたびにどちらかが切って勝っているのだ。しかも、一方が必ず勝つというわけではなく、一方が勝てば次はもう一方が勝つというふうになっている。

「実際に切る技は『崩し』といいます、それは間違えば大怪我をしてしまうので、『免許』にならないと教えません」

教えられても崩しを練習するということとは危険だからできない。ただ本当はこうだと知識として教えられるだけである。

入門のときの血判の押し方には独自の作法がある。左手の薬指を切ってその血を右手の親指につけ、姓名の下に血判を押

すのだという。たとえば一門の誰かに別な場所で習ったという者が、さらに教わりたいたとときにどうやって血判を押ししたかを尋ねれば、本当に入門していたかどうか分かってしまうのだ。かつてはそうやって技を盗もうとした者もいただろう。門外に漏れないように厳しい掟を作っていたのである。今では大竹師範が著書の中で血判の押し方も公開しているが、掟は守られている。

というわけで、その太刀筋を写真で細かく紹介することはかなわなかったが、「せっかくなのですから見ていってください」と大竹師範は言い、解説付きで『崩し』を披露してくれた。

一度打ち合うごとに、一方が一方を切って勝敗がつく。それは日本刀で実際に切り合ったらそうなるだろうなと思われる、リアルな攻防だった。そして、技が長く作られているのには、もう一つ、戦場での戦いで息切れしない体力を養うという意味もあるという。

人知を超えた『テレバシー』

血判を押して入門しこの道場で稽古した一人に、タレント(V6)の岡田准一さんがいる。NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の主役をつとめるあの岡田さんである。大竹師範によれば、「何か他の流派の経験もあるようですが、すごい素質があります。1週間かかるところを彼は2時間で覚えてしまったんです」という。

棒術。棒の長さは六尺(約1m82cm)。武士は戦場で槍が折れた場合、柄を棒として使い急場をしのいだという



薙刀術。薙刀は八尺三寸(約2m51cm)で、鎌倉時代の僧兵などが使用したものとほぼ同程度の長さがある



香取神道流の入門者は「表之太刀」の四本を最初に学ぶが、初心者がいきなりこれだけ長い形を覚えるのは簡単なことではないだろう。

「覚えるのは大変です。これを3年5年、はじめは頭で覚えて、5年10年やっているうちに体で覚えます。明日の仕事のことを考えながら四ヶ條全部できるようにしなければいけません」

香取神道流には段位はない。目録、免許、極意の三段階があつて巻物を授与されるが、どの技をどういう順序で学ぶかが決まっており、たとえば居合術は入門後半年ほどの早い段階で習う。刀の扱い方を知り、刀そのものの知識を深めることが剣術を学ぶ上でも重要になるからだ。剣術でも甲冑につけない技である「五行之太刀」は、棒術や薙刀術をしっかりと修め、目

録をもらつてから学ぶ。そして前述のように「崩し」を教えられるのは免許以上である。

京増重利さんとリー・ダニエルさんが棒術や薙刀術の技を演武して見せてくれた。そして「はしかかる」と称される太刀で長物棒、槍、薙刀に勝つ極意、鎧通しを自分の右腰に柄を後ろ、鎧を前にして差す「馬手刺し」(「右手刺し」)の極意(こうすると、相手を組み伏せたとき、相手の真ん前に自分の短刀が来て奪われるのを防げる)、さらには千葉県銃砲刀剣類登録審査員でもある大竹師範から刀に関するさまざまな話も聞くことができた。

剣道、居合道、杖道とも七段で、他に柔道、空手、鎖鎌術、十手術など多くの武道に精通し「米国の武蔵」と呼ばれたドン・ドレーガー氏は、昭和41年、44歳で香取神道流に入門。8年後には免許となった。「香取神道流の形稽古の中には、何かもつと深いものがあるのでは」というドレーガー氏の問いかけに応じて、大竹師範は表之太刀の「崩し」を教えた。「崩し」を稽古しながらドレーガー氏は、

「これは人知を超えた技です。これらの技は言うなれば、テレパシーの連続としか申しようがありません」

と言つたそうだ。短い時間話を聞いたただけだが、日本刀や各種の武器を使った戦いについてのさまざまな知恵が、香取神道流に伝わっていることを知った。人知を超えた日本人の知恵(という言い方は矛盾しているかもしれないが)、ここには無尽蔵

香取神道流に入門する場合、現在で文血判を押す

敬白神文之証

一、香取大神御法天真正伝神道流へ入門致ス
 二、於テハ親子兄弟同門タリトモ異リニ他見他言致ス間敷テ候事
 一、口論亦ハ他人ニ対シ兵法ヲ論キ無礼ノ行ヒ致ス間敷候事
 一、諸勝負事ハ勿論其地他敷場所へ立テ寄リ致ス間敷候事
 一、免許無之時ハ他流試合致ス間敷候事
 右之条々堅ク相守リ可申候若シ背クニ於テハ香取大神殿一役大神ノ御神罰ヲ蒙ル可キモノ也依テ神文証如件

飯篠修理亮殿

に眠っているに違いない。

外国人入門者が急増中

道場に掲げられた門人の名札を見て驚きを禁じ得なかつた。入門順に名札が並んでいるが、新しくなるほどカタカナの名前が多く。近年は20人ぐらゐ外国人が続いてようやく漢字の名前が1人出てくるというような状況だ。

「帳面を見ていたら、今外国人が25カ国、750人います。4、5年前から急に増えました」

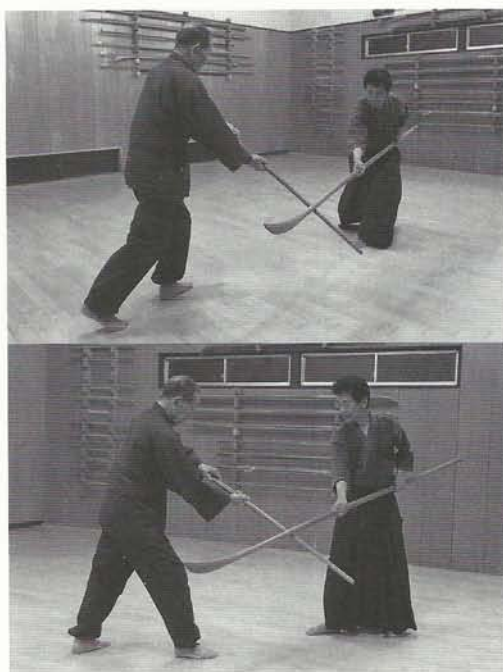
と大竹師範。なぜ近年急に増えたかは



小太刀は短い武器だが、清眼に構えたと両手で持たないぶん腕を伸ばすことができ、写真上の双方が太刀を構えたときと同じ間合になる。香取神道流では「片手打ちは五寸の得あり」といわれ、太刀を持つ側は相手の武器が短いと思いついてかかると打たれてしまう。写真下のように一太刀がかわせば簡単に切ることができる



相手の太刀を受けるとき、このように自分の剣先はいつも相手の中心にあるのが基本。下段などどんな構えでもそれは同じであるという。こうして受けることで相手の剣は滑ってそれていく



「はしかかる」の一例。「長物に掛かるときは、橋かかりはそのままだに勝て」という言葉が伝わっており、これを略して「はしかかる」という。薙刀で肩を切ってきたところを上から押さえて下に打ち落とし、相手が刃を返して足をなぎにくるところを、左右の足を入れ替えて太刀を前に出して進む。すると相手は薙刀の自由を失い、どうすることもできなくなる

■演武・モデル 大竹利典、京増重利、リー・ダニエル
■参考文献 『平法』[大竹利典著・(財)日本武道館発行]

「極意」の一端

ほんの少しだけだが、大竹師範が公開してくれた
天真正伝香取神道流の極意を紹介する

明らかではないが、成田空港に近いことも関連しているのだろうか。もちろん外国の人がこの流儀を学び、日本の伝統武術が世界に広まっていくのはいいことである。だが、「剣の操法」を学ぼうと剣道をしている日本人の中に、これを学びたいという人がもっともと現われてしかるべきなのではないだろうか。ここにあるのは敵を切るためのリアルな技術である。竹刀剣道での稽古だけでは知り得ないことばかりであることは断言できる。

大竹師範の説明で、記者は長い間の疑問が解けた。古武道大会などで香取神道流の演武を見るときには、以上のことを頭に置いて見ると、理解度も違ってくるだろう。そして他の古武道流派に関しても同じようなことはあるかもしれない。本当のところは隠されていたり、稽古の仕方を見せているだけということもある。部外者が演武を見ただけで「どこを打っているか分からない、理合がおかしい」などと判断するのは危険なのだと思えて感じた。

香取神道流について本当のことを知りたければ、血判を押して入門するしかないのである。

※四半世紀近く前のことになりましたが、本誌1990年6月号特集「天真正伝香取神道流」で「表之太刀四ヶ條」のうち「五津之太刀」の「崩し」を大竹師範らが特別に公開しています。お手元に保存されている読者がいらっしやったらぜひ参考にしてください。